

第1回琉球大学外部評価委員会報告書

令和6年3月

第 1 回琉球大学外部評価委員会報告書

日時：令和 5 年 10 月 13 日（金）9:00～11:30

場所：琉球大学 大学本部棟第 2 会議室

令和 4 年度に実施した自己点検・評価の内容に基づき外部評価委員会が実施された。

（1）委員長及び副委員長の選出

国立大学法人琉球大学自己点検・評価の結果に係る外部評価に関する実施要項第 6 条に基づき下地委員が委員長に選出された。また、副委員長については下地委員長から平田委員が指名された。以後の議事は下地委員長により進行された。

（2）令和 4 年度の取組に関する概要説明

西田学長から、令和 4 年度の取組をまとめた報告書である業務実績等報告書の作成経緯や構成等について次の説明があった。

- ・令和 3 年度（第 3 期中期目標期間）までは、国立大学に課せられたルールにより毎年度業務実績報告書を作成し、文部科学省による確認を受けていた。
- ・第 4 期からは毎年度作成する必要はなくなったが、大学自ら実績をまとめた報告書を作成している。
- ・当該報告書の構成としては、琉球大学の中期将来ビジョンと自己点検・評価についての説明の後、令和 4 年度の取組を主な点について絞って記載している。
- ・巻末資料では全ての計画について、取組や成果を自己評価と合わせて記載している。

（3）国立大学法人琉球大学の自己点検・評価結果の検証

（以下、●：外部評価委員、○：琉球大学）

（全体的な意見）

- 琉球大学は、自然科学・歴史・文化については圧倒的な地の利がある。文化施設などでも特色付けに全国で苦勞しているが、北海道と沖縄は特色がある。同様に大学も琉球大学ならではのブランドが打ち出せると考えている。
- 県外から学生が集まるのも特徴であり、ここでしかできない学問・研究をしたいという気持ちをもっている。しかし、予算の影響もあり琉大らしい教育が徐々に減っている印象があった。琉大らしさを全面的に打ち出してはどうか。
- 総合大学として、沖縄唯一の国立大学として使命に尽力していることが、6つのカテゴリ

の取組が網羅されていることからもうかがえた。外部からの期待を認識して、それを実行できる体制にどう持っていけるのか、大学が持っている能力や可能性をより拡大していければ良いと思う。沖縄にある大学として、どのようなことを連携したらより発展的になるか思いを巡らせながら報告書を読んだ。

- 外から琉球大学を見ていると特徴のある取組をしていることが良く分かり、また、獲得されている補助金もあり、私学としては見習わないといけない部分もある。一方で、事業を継続していくために、自立して運営を続けていくためにはどうしたらよいかも考えていけない。
- 沖縄県出身者としては、沖縄出身高校生の大学進学率が気になっている。琉球大学への進学は私学ほどお金がかからないので、県内高校へPRをするとよいのではないかと。
- 第4期のスタートということで、中期将来ビジョンの実現について着実に前進している印象を持った。
- 沖縄の歴史特性・地域文化を生かして運営していることが感じられたが、特に計画50のRX（琉大トランスフォーメーション）の取組が目にとまった。デジタルを用いるのは現代において必須だが、それを組織の変革に繋げるとはとても覚悟のいることで、情報担当部署だけではなく全学構成員の取組としてDX化を進めているのは期待が持てる。
- 報告書のボリュームはコンパクトだが、それを作るための労力は大きいものであろう。第3期の法人評価についても、地域貢献等の取組が高く評価されたと聞いている。大学の姿勢として、大学間コンソーシアムや産学官連携の仕組みが着実に進んでいるので、それらをさらに強くしていく必要がある。
- 沖縄振興策という観点から見たときに、社会・地理・自然の沖縄特性が重要となる。地域に貢献する大学としては、沖縄の特殊性という部分に立ち戻って、弱みの解決だけでなく、強みを生かすというところを打ち出していったらどうか。

(個別の取組に関する意見、質問)

- 中学校の教育プログラムの開発において、附属学校を持っているのは大学の強みであろう。今後の教育学分野の視点として、附属学校を活用した教育や研究はどのようなことを想定しているか。
- 計画8にも記載があるが、教員免許の2枚取得の取組などを進めている。本学には幼児教育の専門家もいるので、そういう教員と協力できる部分もあるかも知れない。中期将来ビジョンを策定する際に、幼稚園と小学校が併設されているのが沖縄の特色だという議論もあった。
- 教育学部は教員免許取得を目指している関係で、幼稚園は主体には取り組めていないが、大学院では幼児教育の専門もあるので、連携は考えていきたい。
- 医学部体験授業の計画があるが、これは県内の医療志望の学生を育てるという背景で進

めている事業なのか。地方大学の共通課題として学生が県内に残らないという問題もあるので、地域の医療機関との連携がより上手くいくと良い。

- 計画 10 で取り上げている、にぬふぁ星講座（医学部体験授業）では、離島の高校生に対しては JTA の協力による航空券の無償提供を受けている。医学科に地域枠を設けているが、離島出身の学生も入学しているので、この講座を受講した高校生にもぜひ入学を目指してほしい。
- 計画 11 に記載のある JST（国立研究開発法人 科学技術振興機構）の事業は非常に強力で推進されていると感じている。次世代的な人材育成について、社会課題を解決する学生を今後も育成して行ってほしい。
- 前職で所属していた機関でも、若手では女性の技術職員が増えており、技術的なセンスを生かして職務をこなしていたことから、人材育成の効果を感じているところである。
- 琉大カガク院は高校生、琉大ハカセ塾は小中学生と分けており、琉大リケジョは中高生を対象にしている。これらは児童生徒が自ら課題を設定し研究するので、内容は毎年のように変化している。3 事業全てに採択されたのは本学のみであり、他大学に先行した取り組みとして評価されている。
- これらの特徴的な取組を広報し、外部から取り上げられるような仕掛けをするなどしていくとより効果的ではないかと思う。計画を進めていく上で苦労するのは KPI の設定だと思うが、それぞれの年度でどのような設定をしているのか。
- 本学も KPI の設定にはかなり苦労している。ここ数年の傾向をもとに算出しているが、KPI の中身は分野により変わるので、これまでの経験的な数値設定をしつつ、可能なものはアウトカムな指標としたのが実際のところである。
- 全てがアウトカムではなくても、可能なものは定量的な KPI を設定するようにしており、年 3 回の点検で計画の進捗確認を行っている。
- 2020 年から新型コロナウイルスの影響が社会に大きな影響をもたらしている。当該報告書ではあまりその影響は感じられないが、どのような影響があったのか横断的に検証するといいいのではないか。
- 本学では危機対策本部を設けて新型コロナウイルス対応に当たっている。現在、危機対策本部の廃止に向けて報告書の準備などを進めているので、次回の委員会ではお話しできるのではないか。
- 過去 5 年間との比較などの情報も当該報告書に反映させてはどうか。また、沖縄県の中長期的な計画との整合も考えて行ってはどうか。
- 地域課題が何なのかを整理する必要がある。沖縄県の振興計画（新・沖縄 21 世紀ビジョン基本計画）を作るときに関わった先生方には、振興計画の議論の際の課題について、地

域連携や産学連携の観点からヒアリングを行うことを手始めに行ったところである。

- 本学の教員が県のヒアリングに参加することは多いが、計画のフォローアップはあまり関与できていないという実情がある。
- 沖縄県側との意見交換の機会を設けてもよいのではないか。

- 国際連携に関しては、卒業生が海外に出ていることはあまり重視されていないように感じている。海外で活躍している卒業生も多いと思うので重視していったらどうか。
- 国際連携については、コロナ禍前の水準に戻りつつある。南米の沖縄県人会と包括連携協定を結び、学生交流を行っていることは、本学の特色ある取組だと思う。今年度も世界展開力強化事業に採択されたので、学生派遣や留学生受け入れに積極的に取り組みたい。
- まさに国際連携そのものも琉球大学の強みであるが、事業という意味では、文部科学省の事業だけではなく、内閣府の沖縄振興事業の活用も重要である。人材育成や貧困対策、ジェンダーを含めた社会変化への対応も沖縄振興の柱になりつつあるので、大学の枠を越えた強みを出すために沖縄振興事業を活用することもよいのではないか。

- 琉大は沖縄らしさを求められると思われる。そこは見失わないように、計画・評価をしていけばよいと思う。
- 沖縄の特性を生かすのは重要。OB としては卒業生を生かしていくのも重要ではないか。
- 広報の必要性について、組織として力を入れているのを感じる。メディアだけでなく地域のステークホルダーとの連携は重要になっていくので、地域への大学の PR に努めていただき、親しみやすい情報発信をお願いしたい。
- コロナ禍の中でこれだけの取組を進めていたという総合大学の組織としての層の厚さを感じたので、アフターコロナに向けてそのリソースを生かしてもらいたい。
- 豊富な学内資源をもっと外に出していくこと、教員だけではなく学生を含め、大学が外につながっていくことが重要である。海外も含めた県内外にある人材を取り込んでいくのも大切なので、新しいネットワークを使いつつ、外との関係を強化していくともっと強い大学になれるのではないか。
- 本委員会で多くの意見をいただき、本学が立地する沖縄という特性をどう生かしていくか、そこをアピールして研究をはじめとした諸活動に生かす重要性を改めて認識した。
- 委員の皆様からは厳しくも温かいご意見をいただき、本学への励みとなり有意義な時間であったと感じている。本委員会は、来年度も開催予定であるため、今後も外から見た琉球大学を見守っていただけたらと思う。

以上

出席者：

<外部評価委員> (敬称略、順不同)

委員長	下地 芳郎	一般財団法人沖縄観光コンベンションビューロー	会長
副委員長	平田 美紀	沖縄女子短期大学	教授
	萩堂 信代	公立大学法人名城大学	地域連携機構 特任参与
	島袋 香子	北里大学	学長
	伊澤 雅子	北九州市立自然史・歴史博物館	館長

<琉球大学>

西田 睦	学長
木暮 一啓	理事 (企画・研究担当)
石原 昌英	理事 (教育・学生支援・国際交流担当)
福治 友英	理事 (地域貢献・施設担当)
大城 功	理事 (総務・財務担当)
富原 加奈子	理事 (特命事項担当)
平敷 昭人	監事
喜納 育江	副理事 (評価・IR 担当)
中村 真也	大学評価 IR マネジメントセンター副センター長